

西鹿渡遺跡

—第36次調査 宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

2020.7

株式会社アーネストワン
盛岡市教育委員会

西鹿渡遺跡

—第36次調査 宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—

2020.7

株式会社アーネストワン
盛岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、岩手県盛岡市^{さんぼんやなぎ}三本柳第2地割22番3、25番1～3地内に所在する^{にしかど}西鹿渡遺跡の第36次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宅地造成工事に伴い、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。野外調査は、平成31年4月17日から令和元年7月11日まで実施した。調査面積は、4,551.8㎡(対象面積5,180㎡)である。
3. 本調査は、事業主の株式会社アーネストワン 代表取締役 松林重行氏と盛岡市教育委員会との間で締結された協定書に基づき、盛岡市遺跡の学び館が野外調査及び出土資料整理並びに報告書編集を実施した。本調査に係る費用は、事業主体である株式会社アーネストワンが支出した。
4. 発掘調査及び本書の編集・執筆は、盛岡市遺跡の学び館 菊地幸裕・佐々木あゆみが担当した。
なお、野外調査及び資料整理には、次の方々が従事した(五十音順)。

阿部 真紀子, 千葉 智子, 西田 千佳, 袴田 英治, 樋口 泰子, 村上 幸子,
村上 美香, 山下 摩由美, 山田 聖子

5. 遺構の平面位置は、平面直角座標X系(日本測地系)を座標変換した調査座標で表示した。

調査座標原点 R X ± 0 ← X - 37,400.000 m
 R Y ± 0 ← Y + 28,600.000 m

6. 挿図中の高さは、標高値をそのまま使用している。
7. 挿図中の土層図は、堆積の状況を重視し、線の太さを使い分けた。土層註記は、層理ごとに本文で記述し、個々の層位については割愛した。

なお、層相の観察にあたっては、『新版標準土色帖』(2013 小山正忠・竹原秀雄)を参考にした。

8. 本書中の地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図「盛岡」「矢幅」及び「盛岡市都市計画整備図」(平成元年)を使用した。
9. 遺構の名称及び記号は次のとおりである。なお、「竪穴建物跡」の名称は、『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編ー』(2010 文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)に倣っている。

遺構種別	記号
竪穴建物跡	R A
土坑	R D
溝跡	R G

10. 土器の区分は、土師器・須恵器・あかやき土器に分類した。「あかやき土器」の名称は、ロクロ使用の酸化炎焼成土器(坏類, 甕類)に使用し、ロクロ使用の内面黒色処理の坏類は、「土師器」に分類した。
11. 遺跡全景空中写真撮影及び出土遺物実測図化は、(株)タックエンジニアリングが行った。
また、出土炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)及び樹種同定は、(株)加速器分析研究所が行い、その結果を附章に掲載した。
12. 本調査に関する出土遺物及び記録類は、盛岡市遺跡の学び館で保管・管理している。

目 次

例 言
目 次

I 遺跡の環境	1
1 遺跡の位置	1
2 地形及び地質	2
3 周辺の遺跡	3
4 これまでの調査	3
II 調査経過	7
1 調査に至る経緯	7
2 調査方法	7
III 遺構と遺物	9
IV まとめ	21

附章

西鹿渡遺跡第 36 次調査出土炭化材の放射性炭素年代 (AMS 測定)

西鹿渡遺跡第 36 次調査出土炭化材の樹種同定

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 西鹿渡遺跡 位置図	1
第 2 図 地形分類と周辺の遺跡	2
第 3 図 西鹿渡遺跡 全体図	6
第 4 図 西鹿渡遺跡 第 36 次調査区全体図	8
第 5 図 R A 057 竪穴建物跡 (1)	10
第 6 図 R A 057 竪穴建物跡 (2)	11
第 7 図 R A 057 竪穴建物跡 遺物出土状況	12
第 8 図 R A 058 竪穴建物跡	13
第 9 図 R A 058 竪穴建物跡 遺物出土状況	14
第 10 図 R A 059 竪穴建物跡 (1)	15
第 11 図 R A 059 竪穴建物跡 (2)	16

第12図	R A 057 竪穴建物跡 出土遺物	17
第13図	R A 058・059 竪穴建物跡 出土遺物	18
第14図	R D 038・039 土坑	19
第15図	R G 012 溝跡	20
第16図	西鹿渡遺跡 住居規模散布図	21

写真図版目次

第1図版	第36次調査区 全景
第2図版	R A 057 竪穴建物跡
第3図版	R A 058 竪穴建物跡
第4図版	R A 059 竪穴建物跡, R D 038・039 土坑, R G 012 溝跡
第5図版	R A 057 竪穴建物跡 出土遺物
第6図版	R A 057～059 竪穴建物跡 出土遺物

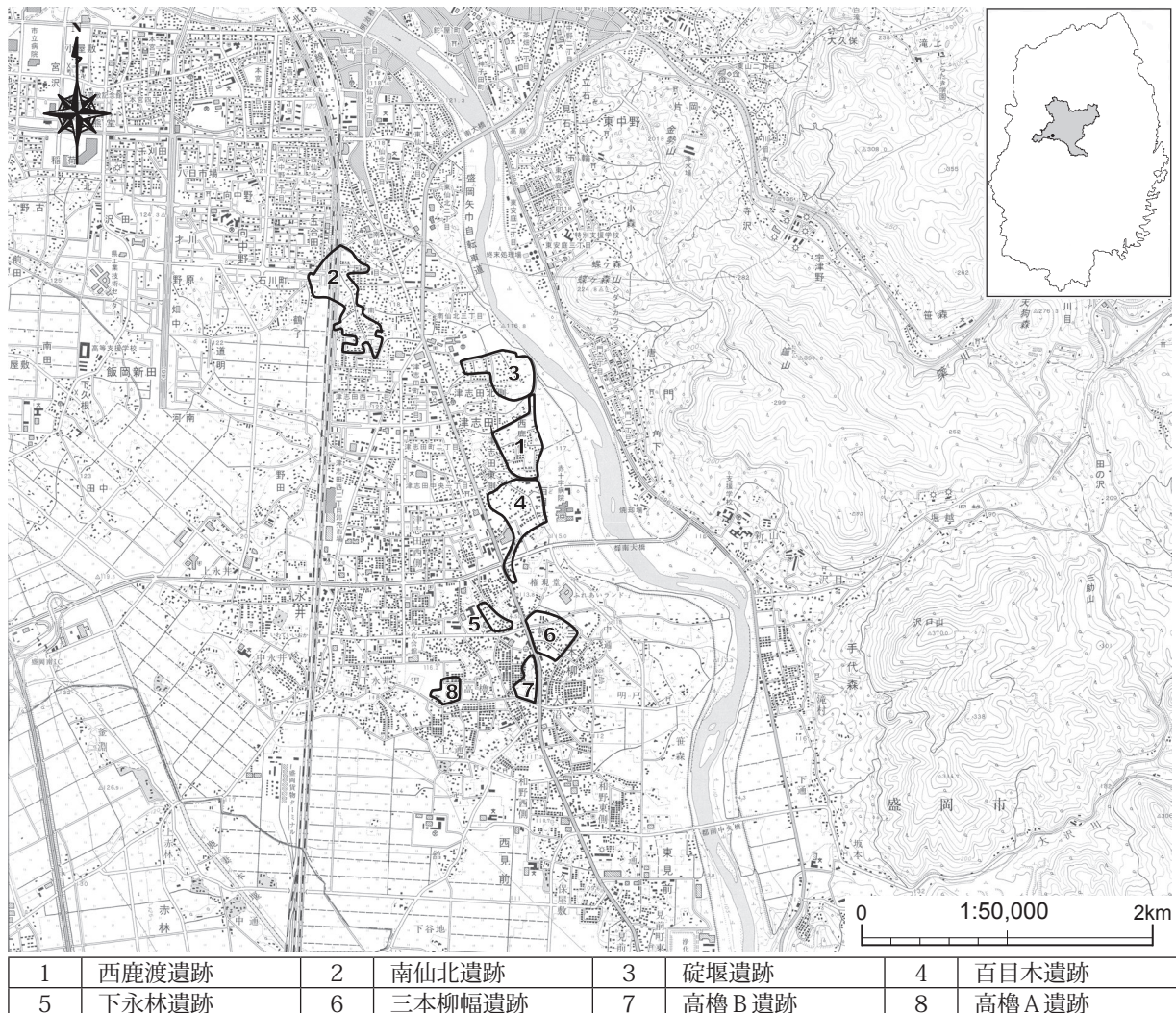
I 遺跡の環境

1 遺跡の位置

岩手県盛岡市は、県土のほぼ中央に位置している。市域の北側を岩手町・葛巻町，東側を岩泉町・宮古市，南側を矢巾町・紫波町，西側を八幡平市・滝沢市にそれぞれ接している。岩手県の県都として、人口約 30 万人，総面積約 886.47km²を測る。

西鹿渡遺跡は、JR 東北本線 仙北町駅から南東に約 2.5km，盛岡市三本柳第 2 地割地内に所在する。遺跡の北方約 0.6km には、盛岡第四高等学校が位置し，南方約 0.3km には、赤十字病院が所在する。遺跡の範囲は、北上川と国道 4 号線に挟まれた東西約 300m，南北約 400m で、北東端が突端状に突き出ている形態を呈している。

本遺跡及びその周辺は、かつては畑地や果樹園が多く点在していたが、近年は宅地化が顕著となり、本遺跡内のほとんどが住宅地である。今次調査地点は、宅地化されていない箇所、現況は畑地である。

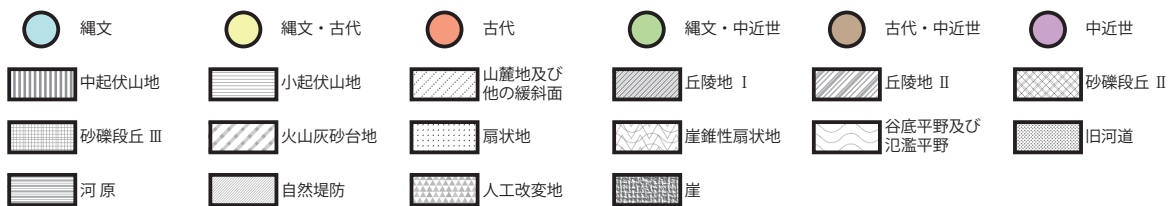
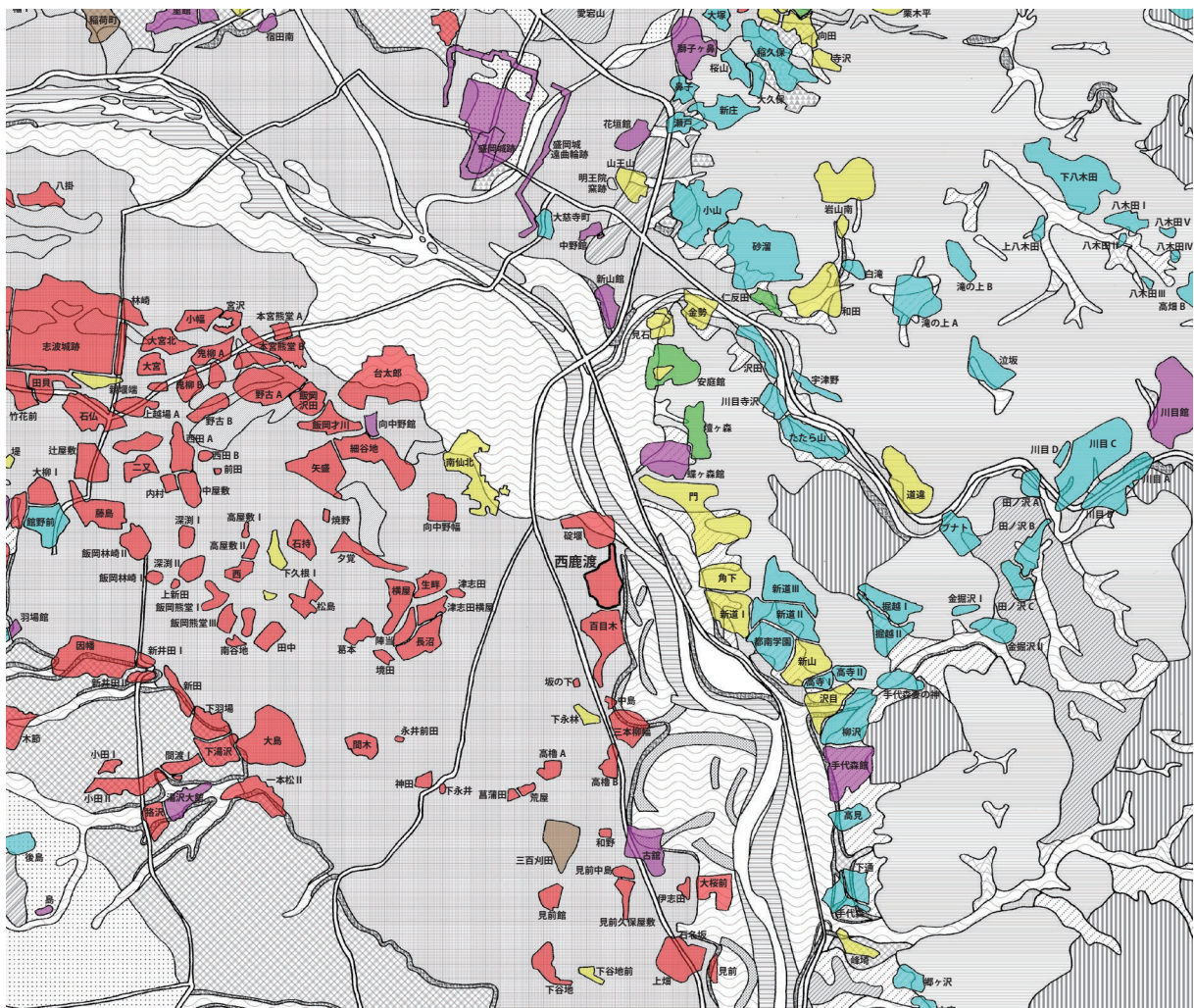


第 1 図 西鹿渡遺跡 位置図

2 地形及び地質

本遺跡の東側には東北地方最大河の北上川が縦断し、その兩岸には谷底平野が形成されている。北上川西岸では、さらに台地が広がっている。この台地は扇状地や旧河床が段丘化したものと考えられ、特に、中・低位段丘が広面積を占めている。本遺跡は、この低位段丘の北東端部に立地している。台地の西方には奥羽背陵山地の一部をなす東根山山地等が控えており、この東麓部には大規模な複合扇状地が発達し、段丘面へと移行している。一方、北上川東岸は、段丘の発達は不良で、小起伏山地の手代森山地や佐比内丘陵が広がっている。

北上川と本遺跡の北を西流する雫石川は流路の転換が顕著で、北上川西岸と雫石川南岸には細かい旧流路跡が網状に残存している。本遺跡もその旧流路に四方を画されている。



第2図 地形分類と周辺の遺跡

3 周辺の遺跡

盛岡市内には、旧石器時代から近世までの遺跡が所在しているが、このうち、本遺跡が所在する雫石川南岸から北上川西岸の区域には、古代の集落跡が数多く点在している。

本遺跡の南方約 0.1km、旧河道を挟んで百目木遺跡が所在する。これまでの調査で、奈良・平安時代の竪穴建物跡が 100 棟以上確認されている大規模集落跡である。分けても昭和 53 年に行われた第 1 次調査は、大型ショッピングセンター建設に伴う事前調査として旧都南村教育委員会が実施したもので、奈良・平安時代の竪穴建物跡 80 棟、縄文時代の土坑 6 基等を検出し、当該遺跡が奈良・平安時代の大規模集落跡であることが判明した知見である。

本遺跡の南西約 1.6km には、高櫓 A 遺跡が所在する。平成 16・18・21 年の 3 ケ年に隣接しあう 3 地点を調査した結果、奈良時代末から平安時代初頭の竪穴建物跡 34 棟をはじめとする遺構が検出された。竪穴建物跡のカマド方位は、北と北西が大勢を占め、該期の特徴を示している。建物跡の規模の観点からは、一辺 5m 以上の大型住居と中・小型住居がセットとなって集落を形成したことが窺え、この点においても該期の特徴が看取される。

本遺跡の南西約 1.0km には、下永林遺跡が所在する。古くより蝦夷塚の伝承がある地域で、昭和 10 年には、当地周辺で蔵手刀 1 振が出土している。大道西古墳とも呼称される遺跡である。平成 28 年から継続して実施されている調査で、古墳の円形周溝 24 基が確認された。そのほとんどは後世の削平により主体部は確認されなかったが、全容が判明しているもので、径 10m 前後を測る。周溝埋土上層で確認された十和田 a 降下火山灰及び周溝内出土土器等から、8 世紀後葉～9 世紀前葉の帰属が想定される。当該地域における墓域の存在を示唆する知見である。

本遺跡の北西約 1.0km には、南仙北遺跡が所在する。これまでに 40 回の調査が行われているが、殊に盛岡南新都市開発整備事業に伴う事前調査の件数が顕著である。調査の結果、古代の竪穴建物跡、土坑、溝跡等の遺構が検出された。また、現在の市道に並行して走行する近世以降の道路状遺構も確認されている。遺物は、土師器、須恵器、鉄製品等が出土しており、特徴的な遺物として、墨書土器が出土している。

4 これまでの調査

本遺跡は、昭和 55 年、旧都南村教育委員会が実施した第 1 次調査を嚆矢とし、今次調査まで、本調査 15 回、試掘調査 21 回を実施している。

第 1 次調査は、宅地造成工事に伴う事前調査として、昭和 55 年に実施した。調査の結果、奈良時代の竪穴建物跡 1 棟、平安時代の竪穴建物跡 1 棟、時期不詳の竪穴建物跡 1 棟等の遺構と、奈良時代の土師器 坏・甕、平安時代の土師器 坏・甕、須恵器 坏等の遺物が検出された。

平成 15 年に実施した第 18 次調査は、宅地造成工事に伴う事前調査として、約 2,200㎡を対象とした。その結果、奈良時代の竪穴建物跡 13 棟、平安時代の竪穴建物跡 4 棟等の遺構と、土師器、須恵器、土製紡錘車、鉄鏃等の遺物が確認された。

第 25 次調査は、本調査区の南に位置し、福祉施設建設に伴い実施したものである。調査の結果、

奈良時代の竪穴建物跡 1 棟，平安時代の竪穴状遺構 1 基等の遺構と，土師器 坏・甕，あかやき土器 坏等の遺物が確認された。竪穴建物跡は，北西方向のカマドを有し，一辺約 2.7m の小型住居であった。

第 32 次調査は，宅地造成工事に伴う事前調査として約 1,600㎡を対象として行い，奈良時代の竪穴建物跡 6 棟，平安時代の竪穴建物跡 2 棟が検出された。盛岡周辺における奈良時代の竪穴建物跡は，北～北西壁にカマドを有するのが大勢を占めるが，当該調査で確認された該期の竪穴建物跡 6 棟のうち 5 棟は南カマドであることが特徴である。本遺跡の様相の一端を示す知見である。

第 35 次調査は，3,032㎡を対象として平成 30 年に実施した。奈良時代の竪穴建物跡 5 棟，竪穴状遺構 1 基等の遺構と該期の土器が確認されている。竪穴建物跡は，北～北西にカマドを有する中小型住居であった。

今次調査と同時期に実施された第 37 次調査では，奈良時代の竪穴建物跡 1 棟と土坑が検出された。竪穴建物跡は 1 辺 7m 超の規模で，本遺跡では最大級の規模である。特徴的な遺物として，脚部に透かしの入った赤彩高坏が出土している。家父長層の住居が想起されるもので，本遺跡の様相を窺う上で重要な知見である。

本遺跡は，奈良・平安時代の集落跡と想定されるものの，従前の調査例は，試掘調査や個人住宅建築等に伴う小規模な発掘調査が大勢を占めているため，遺跡の様相については，明確にしえない部分が多い。さらなる類例の増加が待たれるところである。

西鹿渡遺跡調査一覧

回数	区分	所在地	調査原因	面積 (㎡)	調査期間	主な検出遺構
1	本調査	三本柳 2 地割地内	宅地造成	1,000	1980.7.20 ～ 8.14	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟，平安時代の竪穴建物跡 1 棟，時期不詳の竪穴建物跡 1 棟
2	試掘	三本柳 2 地割 28-1,2	宅地造成	652	1993.8.18 ～ 8.19	奈良・平安時代の竪穴建物跡 12 棟，土坑 4 基，古代以降の溝跡 4 条
3	試掘	三本柳 2 地割地内	宅地造成	100	1993.6.16	遺構・遺物 なし
4	試掘	三本柳 2 地割 42-8 外	宅地造成	172	1993.12.20	遺構・遺物 なし
5	本調査	三本柳 2 地割 36-2	防火水槽建設	63	1994.9.1 ～ 9.3	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟，土坑 2 基
6	本調査	三本柳 2 地割 22-7	個人住宅建築	291	1995.7.4 ～ 7.11	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟，土坑 1 基，時期不明の溝跡 1 条
7	本調査	三本柳 2 地割 16-5,6,36	個人住宅建築	393	1995.8.18 ～ 9.5	縄文時代の土坑 1 基，奈良時代の竪穴建物跡 3 棟，土坑 3 基，古代の溝跡 1 条
8	試掘	三本柳 2 地割 39-1	共同住宅建築	54	1997.11.11	遺構・遺物 なし
9	試掘	三本柳 2 地割 47-5	宅地造成	268	1997.11.28	遺構・遺物 なし
10	試掘	三本柳 3 地割 5-2	共同住宅建築	68	1998.2.12	遺構・遺物 なし
11	試掘	三本柳 2 地割 36-1,5	共同住宅建築	196	1998.8.17	平安時代の竪穴建物跡 2 棟
12	本調査	三本柳 2 地割 36-2,5,6	宅地造成	970	2002.10.1 ～ 12.2	奈良時代の竪穴建物跡 5 棟，土坑 3 基
13	試掘	三本柳 2 地割 25-1	共同住宅建築	820	2002.7.23 ～ 7.25	奈良時代の竪穴建物跡 5 棟，時期不明の溝跡 3 条
14	試掘	三本柳 2 地割 36-1,3,4	宅地造成	555	2002.7.29 ～ 7.31	奈良時代の竪穴建物跡 13 棟，時期不明の溝跡 1 条

次数	区分	所在地	調査原因	面積 (㎡)	調査期間	主な検出遺構
15	試掘	三本柳 2 地割 39-2 外	宅地造成・共同住宅建築	501	2002.11.25 ～ 11.28	古代の土坑 2 基, 溝跡 4 条
16	試掘	三本柳 2 地割 39-43 外	共同住宅に伴う擁壁設置	68	2003.4.14	遺構・遺物 なし
17	試掘	三本柳 2 地割 42-1	共同住宅建築	146	2003.4.16	遺構・遺物 なし
18	本調査	三本柳 2 地割 36-1,3,4	宅地造成	2,226	2003.6.2 ～ 8.2	奈良時代の竪穴建物跡 13 棟, 平安時代の竪穴建物跡 4 棟, 奈良・平安時代の土坑 17 基, 古代以降の溝跡 5 条, 時期不明の土坑 3 基
19	本調査	三本柳 2 地割 39-57 外	擁壁設置	70	2004.4.13 ～ 4.15	時期不明の溝跡 2 条
20	本調査	三本柳 2 地割 49-50～66	下水道敷設・進入路設置	320	2006.7.31 ～ 8.11	奈良時代の竪穴建物跡 2 棟, 竪穴跡 1 棟
21	本調査	三本柳 2 地割 49-50～66	個人住宅改築	62	2007.4.16 ～ 4.27	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟
22	試掘	三本柳 2 地割 16-35	個人住宅建築	77	2009.3.18	平安時代の竪穴建物跡 3 棟, 土坑 1 基
23	本調査	三本柳 2 地割 16-35 外	個人住宅建築	80	2009.6.1 ～ 6.12	奈良時代の竪穴状遺構 1 基, 時期不明の土坑 3 基
24	試掘	三本柳 2 地割 39-64	個人住宅建築	43	2009.10.7	遺構・遺物 なし
25	本調査	三本柳 2 地割 32-1 外	福祉施設建設	750	2010.5.6 ～ 5.31	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟, 平安時代の竪穴状遺構 1 基, 時期不明の竪穴状遺構 1 基, 土坑 1 基
26	試掘	三本柳 2 地割 33-2,3	宅地造成	367	2010.4.23	奈良時代の竪穴建物跡 4 棟
27	試掘	三本柳 2 地割 31-1 外	宅地造成	127	2012.6.15	遺構・遺物 なし
28	試掘	三本柳 2 地割 42-1 外	宅地造成	165	2013.5.9	遺構・遺物 なし
29	試掘	三本柳 2 地割 22-4～6	宅地造成	154	2014.4.30	遺構・遺物 なし
30	本調査	三本柳 2 地割 35-17	個人住宅建築	73	2016.4.27 ～ 5.24	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟
31	試掘	三本柳 2 地割 26-3 の一部	宅地造成	240	2017.4.11	奈良・平安時代の竪穴建物跡 1 棟, 古代以降の溝跡 1 条
32	本調査	三本柳 2 地割 33-2	宅地造成	1,624	2017.5.15 ～ 7.28	奈良時代の竪穴建物跡 6 棟, 平安時代の竪穴建物跡 2 棟
33	試掘	三本柳 2 地割 37-2	長屋住宅建築	104	2017.10.11	遺構・遺物なし
34	試掘	三本柳 2 地割 29-2 外	個人住宅建築	20	2017.11.21	遺構なし
35	本調査	三本柳 2 地割 28-1	宅地造成	3,032	2018.4.9 ～ 7.17	奈良時代の竪穴建物跡 5 棟, 竪穴状遺構 1 基, 古代以降の土坑 4 基, 溝跡 2 条
36	本調査 (今次)	三本柳第 2 地割 22-3, 25-1～3	宅地造成	4,552	2019.4.17 ～ 7.11	奈良時代の竪穴建物跡 3 棟, 古代以降の土坑 2 基, 溝跡 1 条
37	本調査	三本柳第 2 地割 37-9	個人住宅建築	66	2019.5.31 ～ 7.2	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟, 土坑 6 基, 古代以降の柱穴 8 口



第3図 西鹿渡遺跡 全体図

Ⅱ 調査経過

1 調査に至る経緯

西鹿渡遺跡 第36次調査は、盛岡市三本柳第2地割地内において、宅地造成工事に伴って実施した記録保存を目的とした発掘調査（本調査）である。

調査対象地については、平成14年に地権者から埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて協議があり、包蔵地に該当することから、平成14年7月9日に発掘届が提出された。これを受けて盛岡市教育委員会（以下、「当委員会」という）では、平成14年7月23日～25日に試掘調査を実施した（第13次調査）。その結果、奈良時代と想定される竪穴建物跡と溝跡等の遺構と土師器片が確認され、事業実施には本調査が必要である旨を回答した。その後、地権者側で調整が図られた結果、事業を実施することとなり、再度当委員会と協議した。協議により、平成14年に調査対象とした約3,000㎡に北側の約2,000㎡を加えた5,180㎡を発掘調査対象区域とし、緊急発掘調査を実施することになった。

平成30年6月19日に発掘届が提出され、翌31年4月16日、当該事業主の株式会社アーネストワン 代表取締役 松林重行氏と発掘調査を受託された当委員会との間で、「埋蔵文化財に関する協定書」が締結された。これにより、発掘調査は当委員会が主体となり、調査に係る費用は事業主が負担することになった。調査は盛岡市遺跡の学び館が担当することになり、同年4月17日から開始した。

2 調査方法

本調査は、試掘調査で遺構が検出された範囲及びその北側を含む事業対象区域を対象として実施した。調査面積は、4,552㎡である。

調査にあたり、本遺跡全域にグリッドを設定した。グリッドは日本測地系 平面直角座標 X 系の XY 両軸に沿い、50m を単位とした大グリッドを設定した。さらに大グリッドは、2m 四方の小グリッドで 25 × 25 に分割した。グリッド名は、南北軸を 50m ごとにアルファベット大文字、細分した 2m ごとにアルファベット小文字を、東西軸上を 50m ごとと、2m ごとにアラビア数字を付して、A1a1, B2b2, C3c3, …… と呼称していった。

調査は、重機を使用した表土の除去から開始した。表土除去の結果、調査区域の中央帯を中心に、竪穴建物跡が確認され、その精査に着手した。調査は、建物跡の主軸及び直交方向に土層観察用の畔（ベルト）を設定し、層の堆積状況を確認しながら進めた。建物跡内には、土層観察用ベルトを境に、方位を冠して、NW 区、SE 区、…… と呼称したエリアを設定し、そのエリア及び層位ごとに遺物を取り上げた。遺構外から出土した土器は、グリッドごとに取り上げて収納した。特徴的な土器や床面から出土した土器は、出土状況の図化及び写真撮影を行って記録したうえで取り上げた。遺構は床面まで掘り下げた後に、土層の堆積状況を図化及び写真で記録し、完掘した。完掘後、平面図の図化及び完掘状況の写真を撮影した。全ての遺構の調査終了後、地形測量及び空中写真撮影を行い、本調査を終了した。



第4図 西鹿渡遺跡 第36次調査区全体図

Ⅲ 遺構と遺物

R A 057 竪穴建物跡（第 5 図・第 6 図・第 7 図）

位置 調査区西部（A22w9 区） 平面形 不整隅丸方形 重複関係 なし
規模 南北 4.20m, 東西 5.10m（検出部分） 主 軸 N-10° -W
埋 土 A～E 層に大別され，A・C 層はそれぞれ 2 層に細分される。

A 層は，黒褐色土を主体とする層で，黄褐色シルト粒を少量含んでいる。A₂ 層の方がシルト粒の含有率が若干高く，シルト塊も含まれていた。

B 層は，黒褐色土を主体とする層で，黄褐色シルト粒を少量含んでいる。

C 層は，黒褐色土を主体とする層で，黄褐色シルト粒を中み，含有率で 2 層に細分した。

D 層は，暗褐色土を主体とする層で，黒褐色土粒と黄褐色土粒を少量含む。

E 層は，黄褐色土を主体とする層で，黒褐色土粒と暗褐色土粒を少量含む。

壁の状態 北壁が調査区外に延び，東壁が攪乱により湮滅しているが，遺存部分においては，外傾して直線的に立ち上がっている。検出面からの深さは，約 0.36m を測る。

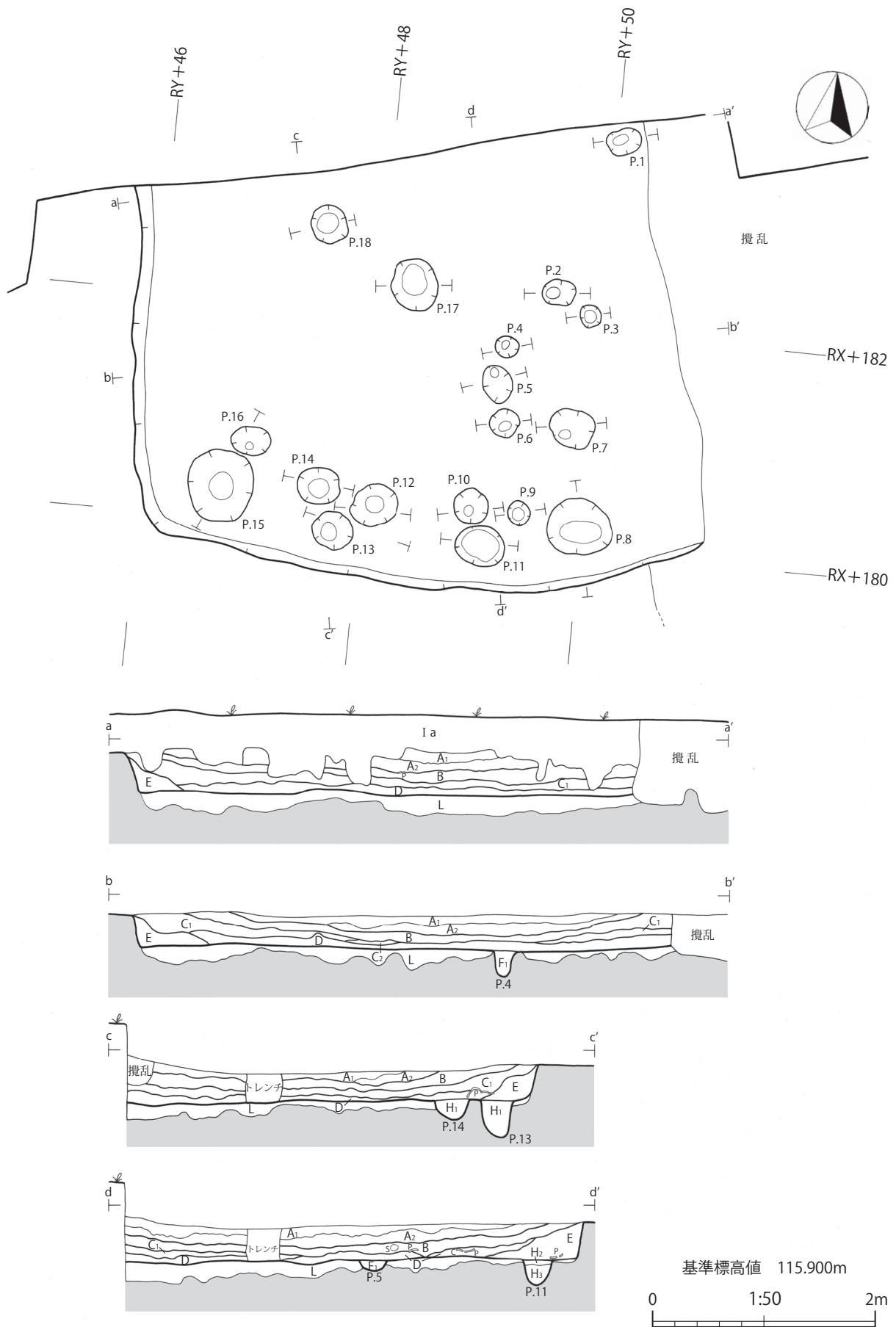
床の状態 遺存部分はほぼ平坦で，全体的に硬く締まっている。明確な硬化面は認められなかった。
構築土（L 層）は，黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。

カマド 検出されなかった。東壁は攪乱により湮滅していたが，周辺で焼土粒や煙道の痕跡等は認められず，この壁でのカマドの存在は肯定しがたい。調査区外の北壁にカマドが存在していたと推測される。

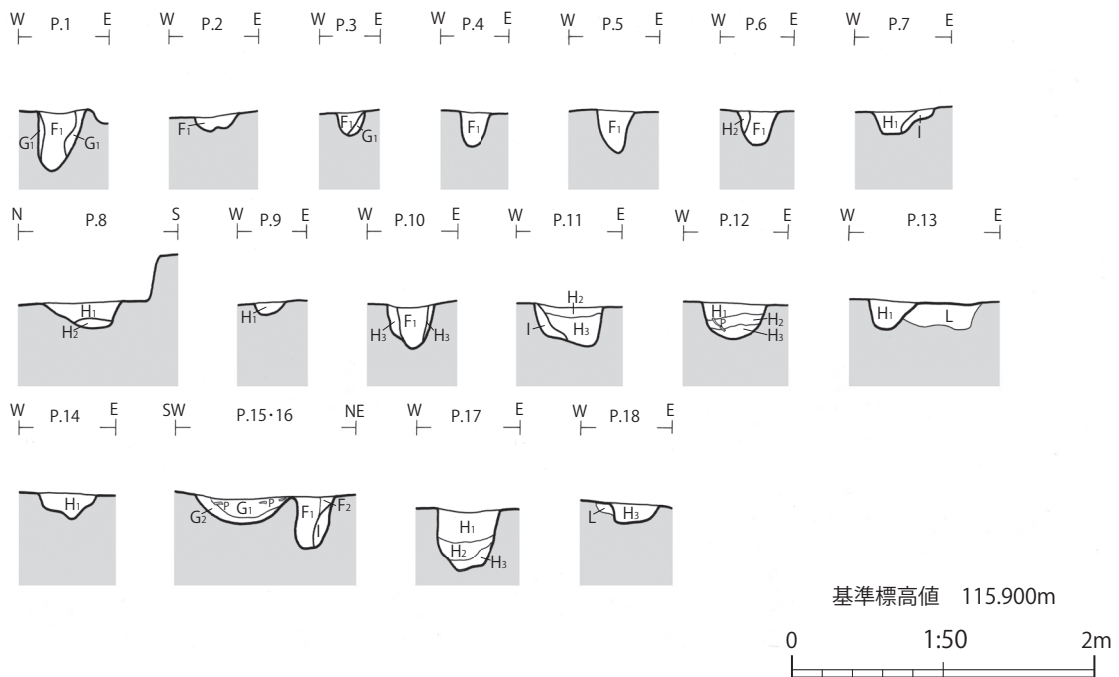
ピット 18 口検出した。平面は，不整円形または不整楕円形を呈する。規模は，P.1－径約 0.30 m，深さ約 0.40 m，P.2－径約 0.30 m，深さ約 0.14 m，P.3－径約 0.18 m，深さ約 0.15 m，P.4－径約 0.21 m，深さ約 0.22 m，P.5－径約 0.24 m，深さ約 0.28 m，P.6－径約 0.27 m，深さ約 0.23 m，P.7－径約 0.27 m，深さ約 0.16 m，P.8－径約 0.53 m，深さ約 0.19 m，P.9－径約 0.20 m，深さ約 0.09 m，P.10－径約 0.31 m，深さ約 0.29 m，P.11－径約 0.45 m，深さ約 0.28 m，P.12－径約 0.42 m，深さ約 0.24 m，P.13－径約 0.32 m，深さ約 0.20 m，P.14－径約 0.38 m，深さ約 0.18 m，P.15－径約 0.64 m，深さ約 0.19 m，P.16－径約 0.27 m，深さ約 0.35 m，P.17－径約 0.43 m，深さ約 0.42 m，P.18－径約 0.33 m，深さ約 0.13 m を測る。

埋土は大きく 3 種類に分けられる。P.1・P.2・P.3・P.4・P.5・P.6・P.10・P.16 は黒褐色土を主体とし，黄褐色シルト粒を少量含む土層である。焼土粒及び炭化物粒も僅かに含まれていた。P.7・P.8・P.9・P.11・P.12・P.13・P.14・P.17・P.18 は暗褐色を主体とする土層で，黄褐色シルト粒を少量含む。焼土粒と炭化物も微量混入していた。P.15 は褐色土を主体とする層である。焼土粒と炭化物が微量含まれていた。P.15 は規模や検出位置，遺物出土状況等から柱穴以外の用途も想定される。

出土遺物（第 12 図） 土師器 坏・埴・甕・球胴甕・甑が出土した。土器は，建物跡南半部から多く出土している。南東部からは炭化物も確認されている。



第5図 RA 057 竪穴建物跡(1)



第6図 RA 057 竪穴建物跡 (2)

1～3は、土師器 坏である。いずれも底部は丸底で、体部下半に段を有し、1・2は内面が黒色処理され、3は内外面ともに黒色処理されている。器面調整は、いずれも器外面はヘラナデで、器内面はいずれもヘラミガキである。4・5は、土師器 壺である。4は丸底の底部から彎曲して体部が立ち上がり口縁部に至っている。5は平底で、体部に段を有する。調整は、内外面ともにヘラミガキで、5の体部下半は一部ヘラケズリが施されている。

6～8・10は、土師器 甕である。器形の全体が判然とするのは8のみで、若干張り出した底部から内彎しながら体部が立ち上がり、頸部に段を有して、口縁部が外反する器形を呈する。欠損している6・7・10も同様の器形と推測される。器面調整は、内外面ともにヘラナデである。9は、土師器 球胴甕である。体部は球胴形を呈し、頸部に僅かに段を有し、口縁部が大きく開いている。内外面ともにヘラナデが施されている。11は、土師器 甑である。底部に大きな孔がある単孔式で、頸部に僅かな括れがあるが、底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がっている。器面調整は、内外面ともにヘラナデが施されている。

RA 058 竪穴建物跡 (第8図・第9図)

位置 調査区南部 (B22n20区) 平面形 不整隅丸方形 重複関係 なし

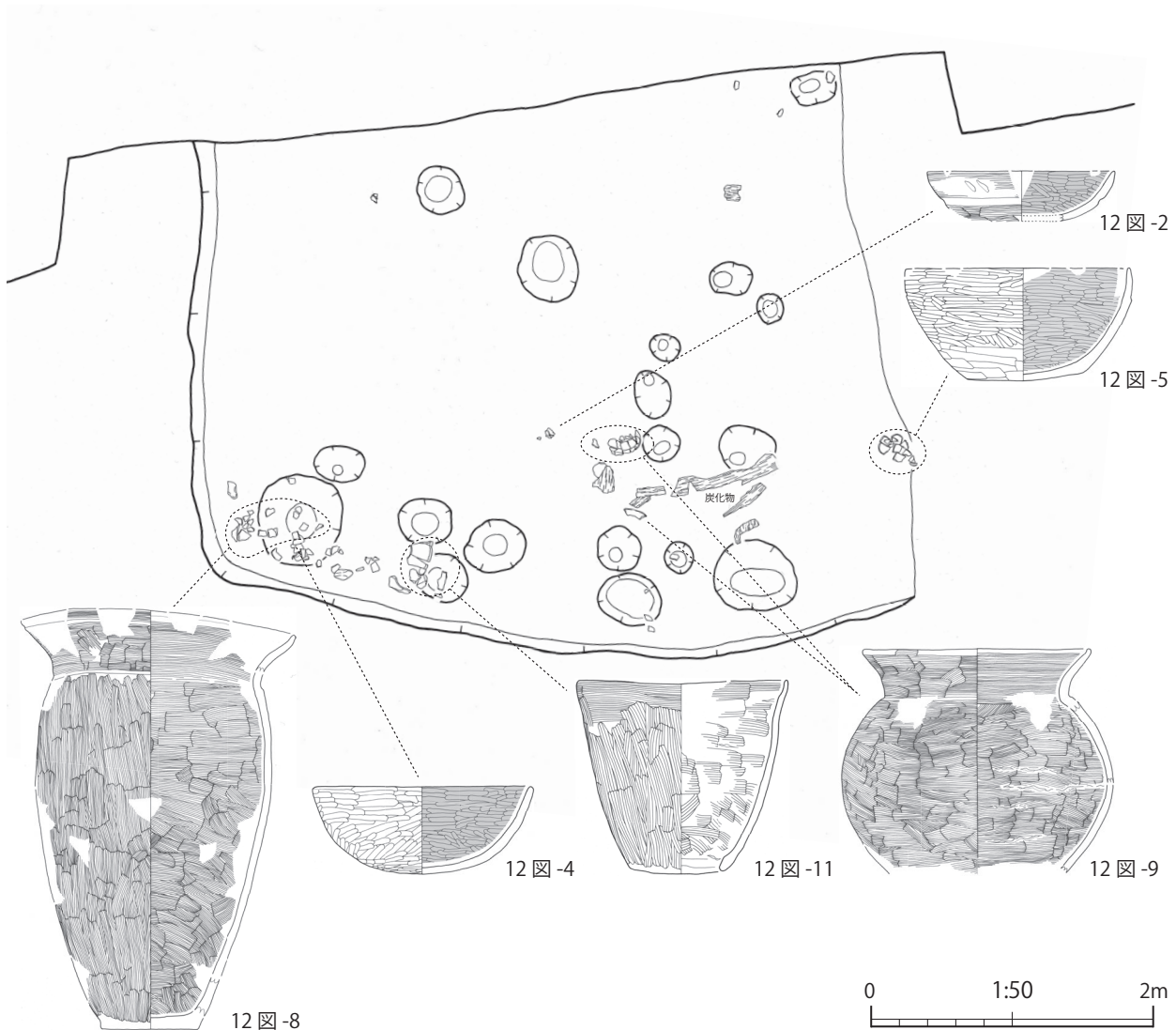
規模 南北 3.07m, 東西 3.88m (検出部分) 主 軸 N-18° -W

埋 土 A～C層に大別され、A・B層は2層に細分される。

A層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。シルト粒の含有率はA₂層の方が若干高い。

B層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。

C層は、黄褐色土を主体とする層で、黒褐色土粒を少量含む。



第7図 RA 057 竪穴建物跡 遺物出土状況

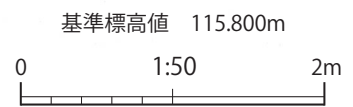
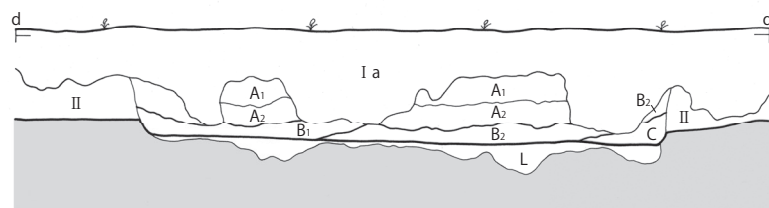
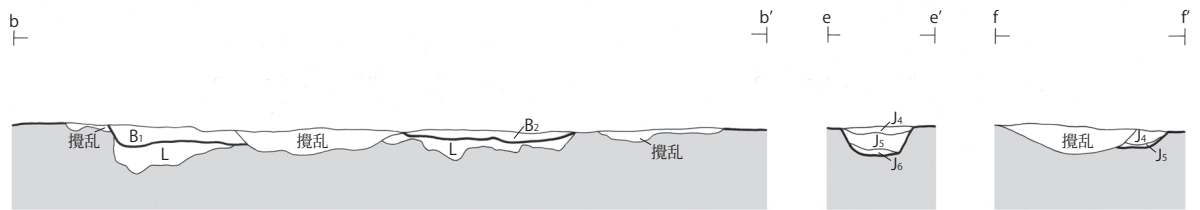
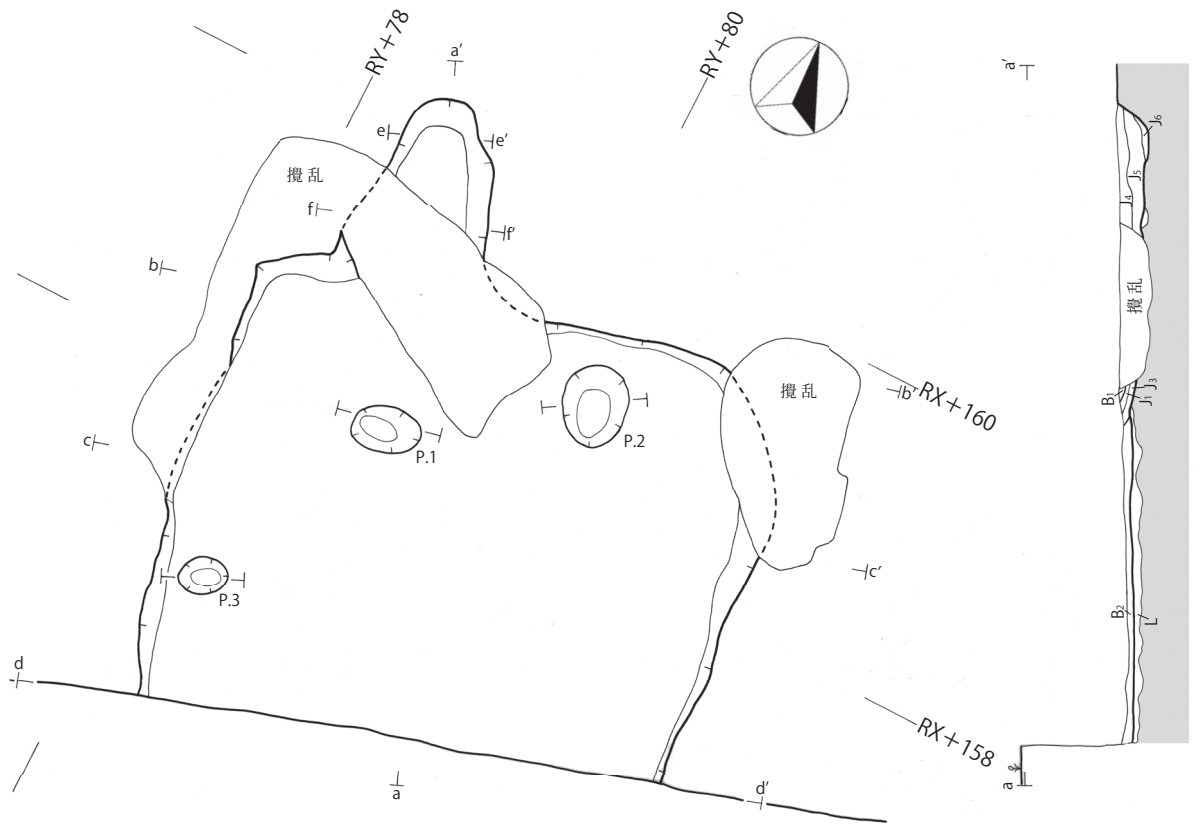
壁の状態 耕作等の攪乱により上半部は大きく削平され、一部が遺存しているのみであった。遺存部分では、床面から外傾して直線的に立ち上がる。検出面からの深さは、約0.16mを測る。

床の状態 床面はほぼ平坦である。明確な硬化面は認められなかった。構築土(L層)は、黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。

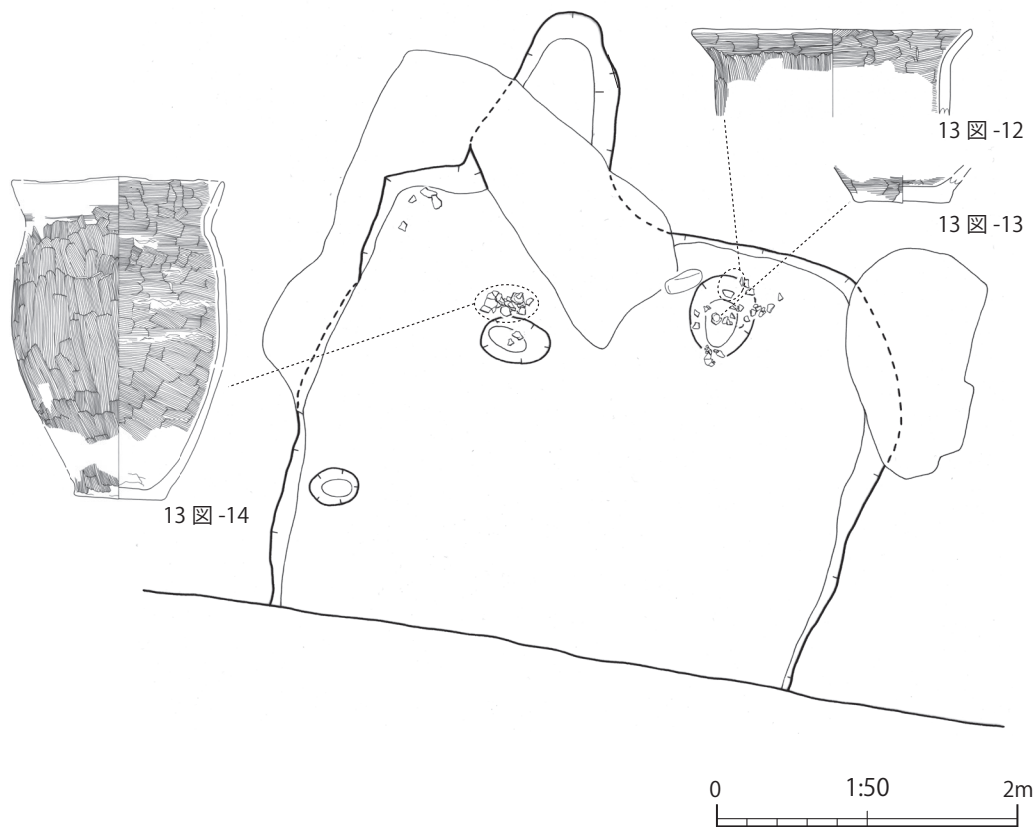
カマド 北壁の西寄りで見出された。攪乱により燃焼部は湮滅しており、煙道の一部が見出されたのみである。

煙道の基底部分は、燃焼部から煙出しに向かって僅かに勾配を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。規模は、長さ約1.23m、最大幅約0.80mを測る。煙道埋土(J層)は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒が混入していた。部分的に天井崩落土と推測される黄褐色シルト塊も点在していた。下層では焼土粒や炭化物が極微量混じっていた。

ピット 3口見出された。いずれも平面は不整楕円形を呈し、規模は、P.1 - 径約0.44m、深さ約0.16m、P.2 - 径約0.44m、深さ約0.16m、P.3 - 径約0.33m、深さ約0.08mを測る。埋土は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を微量含む層である。



第 8 図 RA 058 豎穴建物跡



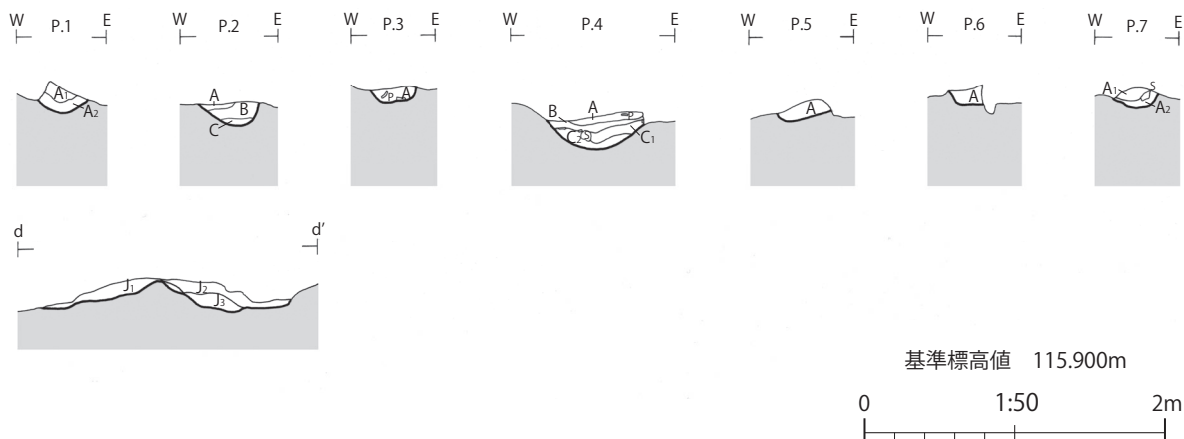
第9図 RA 058 竪穴建物跡 遺物出土状況

出土遺物（第13図） 土師器 坏・甕が出土した。ほとんどが小破片であったため、カマド燃焼部手前と右脇からまとまって出土した甕を図示した。

12～14は、土師器 甕である。12は体部上半が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する器形を呈している。器内外面ともにヘラナデが施されている。14は、若干張り出した底部から体部が内彎して立ち上がり、大きく開く口縁部に至っている。器形に若干歪みが認められる。頸部に明確な段は認められない。器面調整は内外面ともにヘラナデである。

RA 059 竪穴建物跡（第10図・第11図）

位置	調査区東部（C22f4区）	平面形	不整隅丸方形	重複関係	なし
規模	南北 5.52m, 東西 4.45m（推定値）	主 軸	N-20°-W		
埋 土	耕作等による攪乱が極めて著しく、遺存部分は僅かであった。確認された堆積土は当初、建物跡埋土と想定したが、堆積土上面及び下面において平坦面や硬化面が確認されず、土質も黄褐色シルトと黒褐色土の混合土であったため、構築土（L層）と判断した。				
壁の状態	攪乱及び削平により遺存していない。				
床の状態	検出されたのは掘方のみで、床面は遺存していない。				
カマド	北壁の東寄りで煙道と推測される掘り込みを検出した。建物跡の壁から下り勾配を呈している。				



第 11 図 R A 059 竪穴建物跡 (2)

堆積土 (J 層) は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。下層には焼土粒及び炭化物が微量含まれていた。

ピット 7 口検出した。平面は、不整形円形を呈し、規模は、P.1 - 径約 0.33m, 深さ約 0.20m, P.2 - 径約 0.39m, 深さ約 0.15m, P.3 - 径約 0.30m, 深さ約 0.09m, P.4 - 径約 0.65m, 深さ約 0.24m, P.5 - 径約 0.37m, 深さ約 0.13m, P.6 - 径約 0.22m, 深さ約 0.13m, P.7 - 径約 0.29m, 深さ約 0.13m である。埋土は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を含んでいた。焼土粒が混入しているものも確認された。

出土遺物 (第 13 図) 土師器 坏・高坏脚部・甕・球胴甕が出土した。出土位置の分布に大きな偏りはなく、全体から出土している。ほとんどが小破片であるため、3 点のみを図示した。

15 は、土師器 坏である。底部は一部が欠損しているが丸底で、体部下半に段を有する。器内面は黒色処理されている。器面調整は、器外面がヘラケズリ、器内面がヘラナデである。16 は、土師器 高坏の脚部である。裾部が大きく開く器形を呈し、坏部の内面は黒色処理が施されている。17 は、土師器 球胴甕である。球形の胴部から段を有する頸部に至り、口縁部は短く直立する器形を呈する。器面調整は、内外面ともにヘラナデが施されている。

R D 038 土坑 (第 14 図)

位置 調査区中央部 (B22i14 区) **平面形** 不整形楕円形 **重複関係** なし

規模 南北 0.72m, 東西 1.56m (検出部分)

埋土 A ~ D 層の 4 層からなる。

A 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を微量含んでいる。

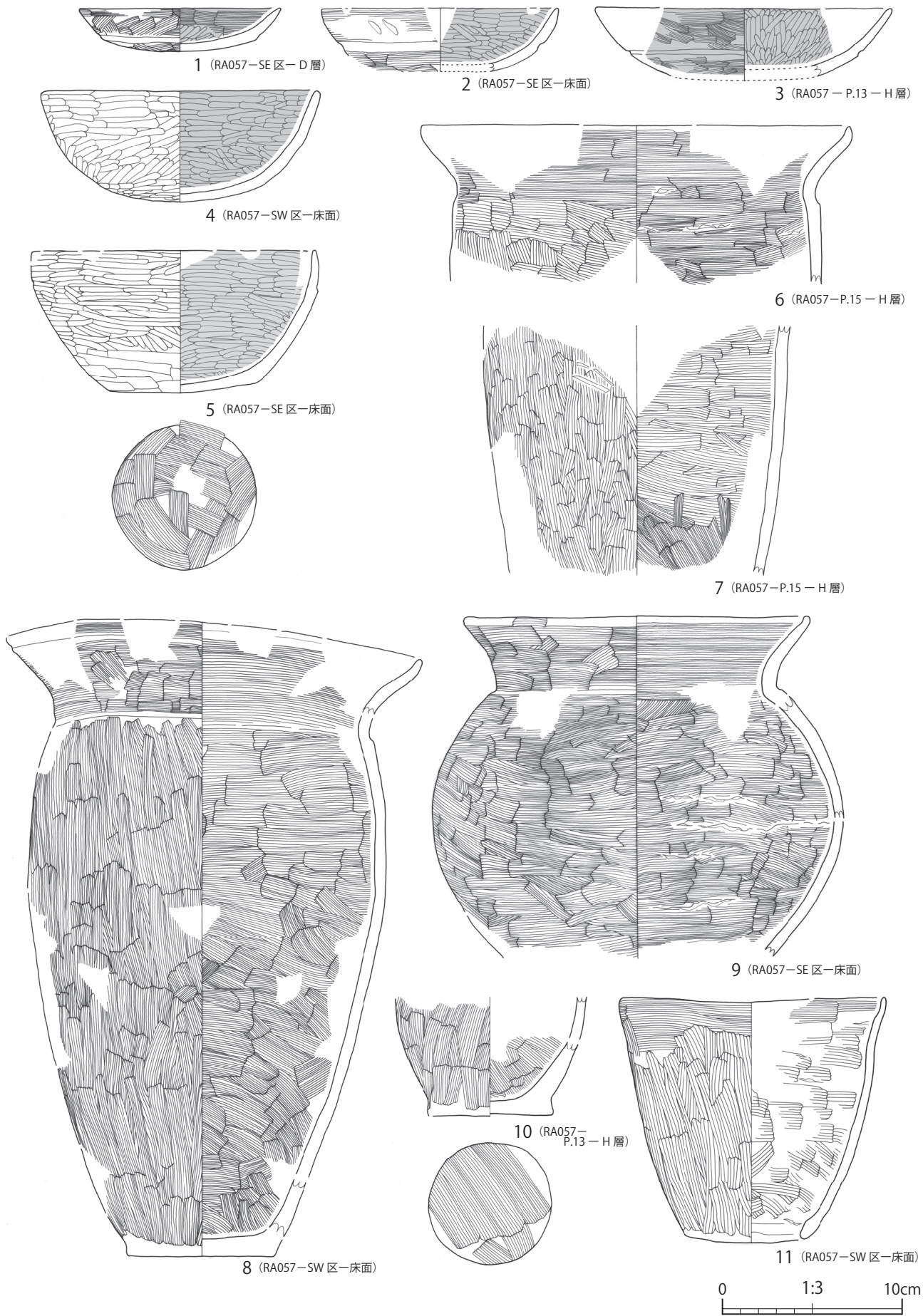
B 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量、焼土粒及び炭化物を微量含んでいる。

C 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。

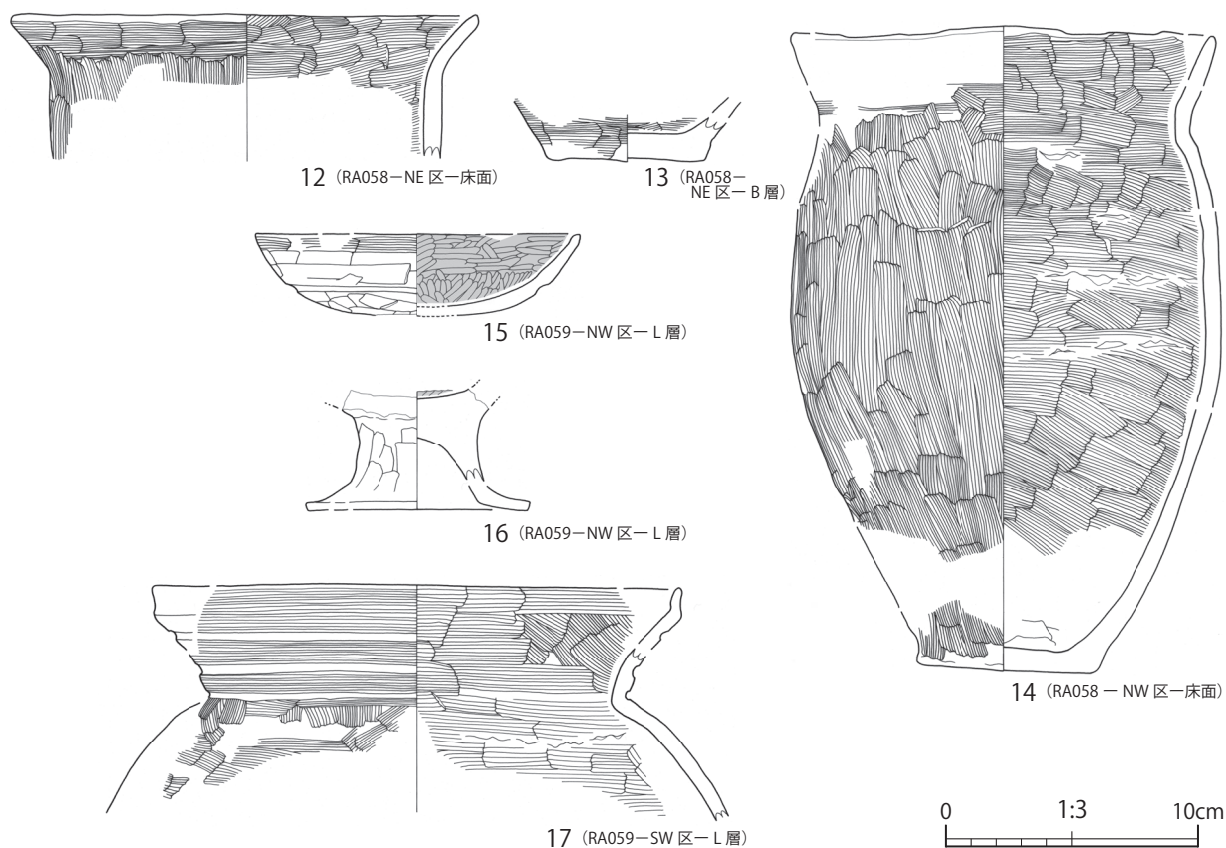
D 層は、暗褐色土を主体とする層で、黒褐色土粒と黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。

底面・壁 壁は外傾して立ち上がる。基底面はほぼ平坦である。検出面からの深さ約 0.17 m を図る。

出土遺物 土師器 甕片が出土しているが、小破片のため図示しなかった。



第 12 図 R A 057 豎穴建物跡 出土遺物



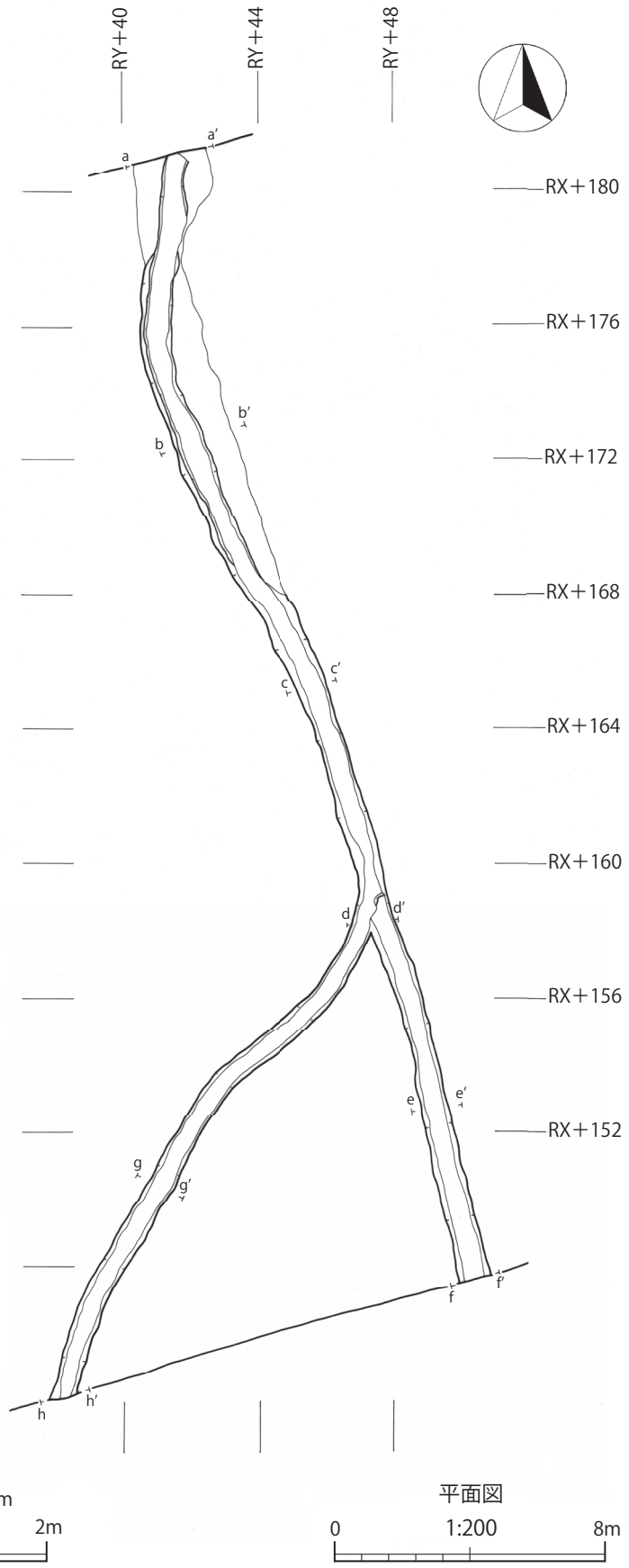
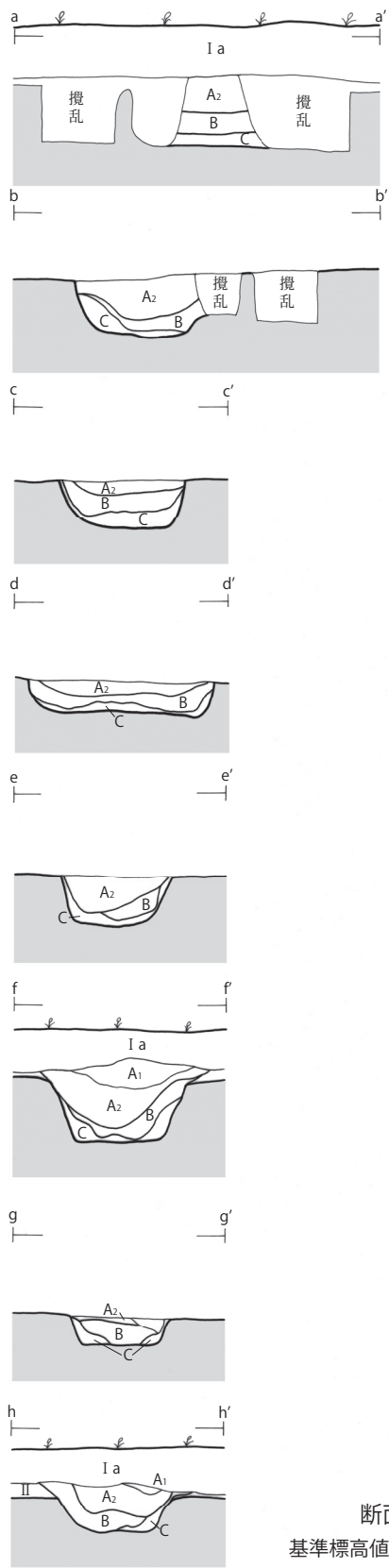
第 13 図 R A 058・059 竪穴建物跡 出土遺物

R D 039 土坑 (第 14 図)

位置 調査区南部 (C22a17 区) 平面形 不整隅丸長方形 重複関係 なし
 規模 北西 - 南東 1.61m, 南西 - 北東 3.71m
 埋土 A・B 層の 2 層からなる。
 A 層は、黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。
 B 層は、暗褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。
 底面・壁 基底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約 0.12 m を測る。
 出土遺物 基底面から土師器 甕片が出土したが、小破片のため図示しなかった。

R G 012 溝跡 (第 15 図)

位置 調査区西部 (A22u10 区 - A22t28 区 - B22a26 区) 重複関係 なし
 規模 最大延長 34.72m, 最大幅 1.03m
 埋土 A ~ C 層の 3 層からなる。
 A 層は、黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。
 B 層は、暗褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。
 C 層は、暗褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。
 底面・壁 基底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの最大深約 0.58 m を測る。
 出土遺物 A 層を主体に土師器 坏・甕片が出土したが、小破片のため図示しなかった。



第 15 图 RG 012 沟迹

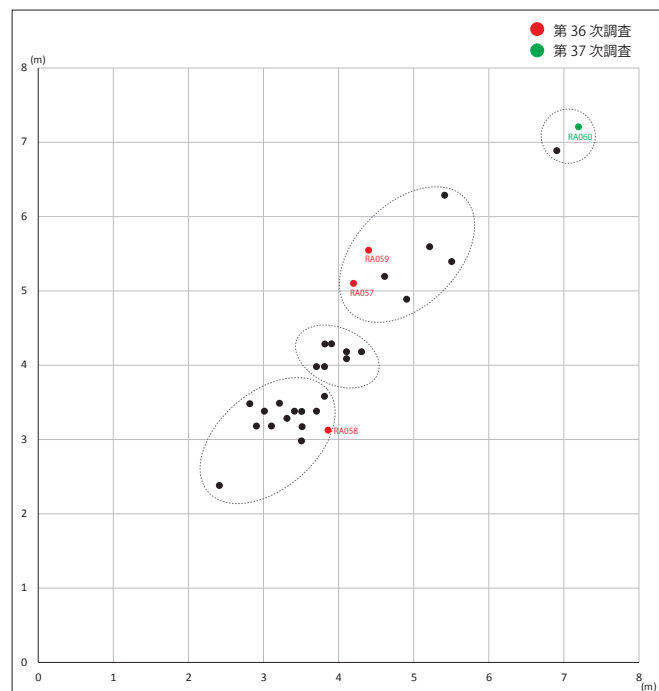
IV まとめ

本調査の結果、竪穴建物跡3棟、土坑2基、溝跡1条が確認された。このうち竪穴建物跡は、出土した土器の様相から、8世紀中葉から後葉に帰属すると考えられる。また、土坑及び溝跡も当該期またはそれ以降の時期が想定される。本章では、竪穴建物跡を中心に本調査を概括する。

今次調査の竪穴建物跡は、調査区外への延長や攪乱による毀損が顕著であるため、全容は判然としないが、遺存部分から推測すると、辺長約5mのR A 057・059竪穴建物跡と、辺長約3mのR A 058竪穴建物跡に分類される。従前の調査における規模の分布をみると、一辺約4m未満・床面積14㎡以下の小型住居、一辺4～5m・床面積14～25㎡の中型住居、一辺約5m以上・床面積25㎡以上の大型住居に類型化される。また、第18次調査及び第37次調査で検出された竪穴建物跡は辺長約7mの規模で、他とは明らかに様相を異にしており、特大住居として一つの形式に類型化すべきであろう(第16図)。当該期における住居規模は、社会的地位を反映したものと考察されており、特大住居は家父長層あるいはその上の階層の住居と想定される。

今次調査地点は、本遺跡の北部に位置している。調査対象面積に比して検出遺構が少ない印象であるが、これは遺跡中心地域から離れているため密度が希薄になった証左であろう。従前の調査例からみれば、本遺跡南東部、第18次調査地点から第20次、第37次調査地点にかけた範囲を集落の主体とみるべきで、ここから離れるに従って集落密度が小さくなっていくと考えられる。

本遺跡の調査は、類例を増してはいるが、遺跡の様相については明確にし得ない部分も多い。特に遺跡西部は類例に乏しく、様相が判然としない。解明が待たれる課題は多いが、さらなる知見の増加を待って、後考を期すこととしたい。



第16図 西鹿渡遺跡 住居規模散布図

附 章

西鹿渡遺跡第 36 次調査出土炭化材の放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

西鹿渡遺跡は、岩手県盛岡市三本柳第 2 地割 22-3 に所在し、低位段丘端部に立地する。測定対象試料は、竪穴建物跡の覆土最下層で、床面から数 cm 上の地点から出土した炭化材 2 点である (表 1)。なお、これらの同一試料を対象に樹種同定も実施されている (別稿樹種同定報告参照)。

2 測定の意義

竪穴建物跡の年代を確認するため。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCal v4.3 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料の ^{14}C 年代は、試料 1 が $1470 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料 2 が $1330 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、試料 1 が 572~623cal AD の範囲、試料 2 が 656~758cal AD の間に 2 つの範囲でそれぞれ示される。試料の年代は、試料 1 が古墳時代後期末頃から古代、試料 2 が古代頃に相当する (佐原 2005)。いずれの試料も炭化材で、樹皮は確認されなかったことから以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる (古木効果)。今回測定された試料 2 点には樹皮が確認されていないことから、炭化材となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- 佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原真, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻, 学生社, 14-19
- Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表 1 放射性炭素年代測定結果 (δ¹³C 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-190876	1	RA057 竪穴建物跡 D層	炭化材	AaA	-25.26 ± 0.44	1,470 ± 20	83.30 ± 0.24
IAAA-190877	2	RA057 竪穴建物跡 D層	炭化材	AAA	-27.91 ± 0.44	1,330 ± 20	84.76 ± 0.26

[IAA 登録番号 : #9808]

表 2 放射性炭素年代測定結果 (δ¹³C 未補正值、暦年較正用¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	δ ¹³ C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-190876	1,470 ± 20	83.26 ± 0.23	1,467 ± 23	572calAD - 623calAD (68.2%)	557calAD - 643calAD (95.4%)
IAAA-190877	1,380 ± 20	84.26 ± 0.25	1,327 ± 24	656calAD - 689calAD (64.3%) 753calAD - 758calAD (3.9%)	652calAD - 715calAD (81.1%) 744calAD - 765calAD (14.3%)

[参考値]

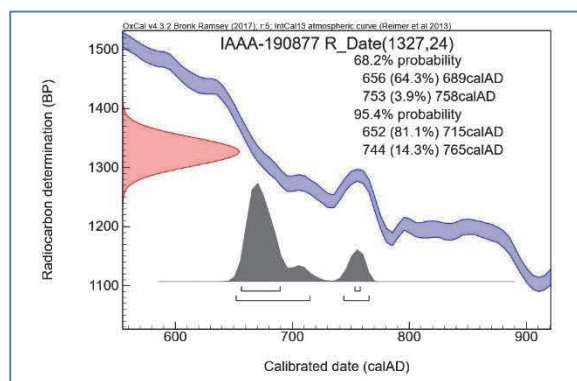
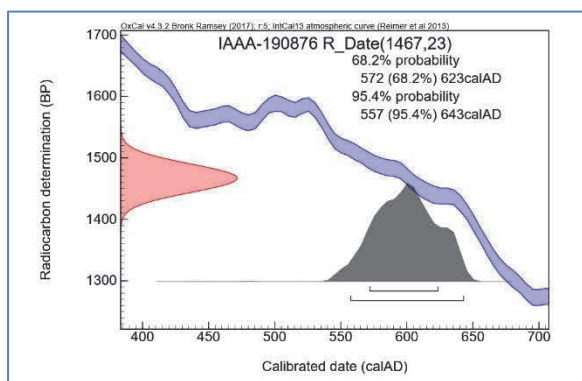


図 1 暦年較正年代グラフ (参考)

西鹿渡遺跡第 36 次調査出土炭化材の樹種同定

1 試料

西鹿渡遺跡は、岩手県盛岡市三本柳第 2 地割 22-3 に所在し、低位段丘端部に立地する。本遺跡の竪穴建物跡から出土した 2 試料の炭化材の樹種同定をおこなった（表 1）。

なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施され、古墳時代後期末頃から古代頃の年代値が示されている（別稿年代測定報告参照）。

2 分析方法

炭化材はステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面を割り出しプレパラートに固定して双眼実体顕微鏡及び反射光式顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づき同定を行った。

3 結果

同定結果を表 1 に示す。本遺跡の炭化材は 1 点がケヤキまたはニレ属、1 点がニレ属である。以下に同定の根拠を示す。

・ニレ属 (*Ulmus*)

年輪はじめに大きい道管が 1~2 列配列し、急に径を減じて小道管が帯状や塊状に複合して斜めに並ぶ環孔材。道管は単穿孔で、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は 1~7 列で平伏細胞のみの同性である。放射組織の周囲は比較的滑らかな紡錘形である。

・ケヤキまたはニレ属 (*Zelkova serrata* or *Ulmus*)

試料 1 は道管の配列と放射組織が平伏細胞のみ観察されることからニレ属のようであるが、放射組織に結晶細胞が多く見られ、放射組織の周囲がやや角ばって見える。破片がかなり小さく脆いため観察できる部分が限られることから、ケヤキの可能性も排除できない。

表 1 西鹿渡遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	遺構	層位	樹種
1	RA057	D層	ケヤキまたはニレ属
2	RA057	D層	ニレ属

4 考察

本遺跡で出土した分類群は、両者とも丘陵や山地に生育する落葉高木である。ケヤキは河川沿いや崩落地など比較的不安定な土地に、ニレ属は山地や丘陵のやや湿潤な場所を好む。本遺跡では竪穴建物跡の床面から検出されたことから、建物構築材もしくは燃料材と考えられるが、提供された試料はかなり小さい破片のため器具などに使われていた木材の可能性もある。ニレ属は建築材に利用されることが多く、ケヤキは建築材のほか器具などに頻繁に使われる（島地ほか 1982）。

岩手県内の古墳時代から平安時代の竪穴建物内炭化材は、全体としてはクリやケヤキが多い

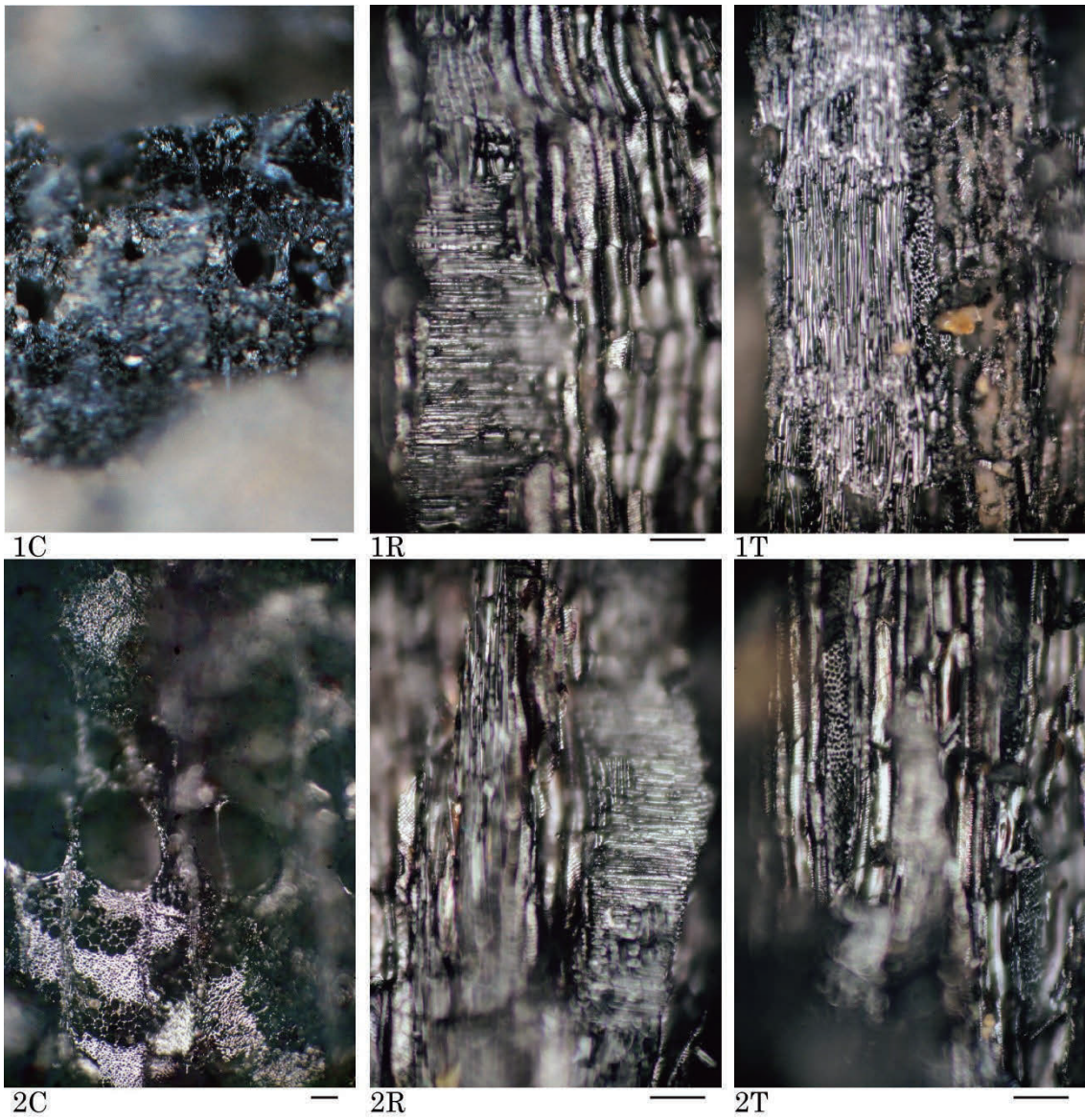
傾向にあるが、建築材に広葉樹を中心に様々な樹種が確認される場合がある。古墳時代から平安時代の住居内炭化材としては、一戸町上野D遺跡でケヤキとニレ属が、江刺市（現奥州市江刺）の久田遺跡でニレ属が出土し、紫波町稲村Ⅱ遺跡や一戸町上野遺跡ではケヤキがやや多く出土している（伊東ほか2012）。

本遺跡の2018年度の分析では、クワ属とカエデ属が確認されており、本遺跡では広葉樹を中心とし様々な樹種を利用していると考えられる。

文献

島地謙・伊東隆夫 1982 図説 木材組織 地球社

伊東隆夫・山田昌久 2012 木の考古学 出土木製品用材データベース 海青社



図版1 西鹿渡遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

1. ケヤキまたはニレ属 (試料1, 住居 RA057) 2. ニレ属 (試料2, 住居 RA057)

C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm

写真図版



第36次調査区 遠景（北東から）



第36次調査区 全景（南東から）

第1図版 第36次調査区 全景



完掘全景（南から）



遺物出土状況（西から）



遺物出土状況（西から）



遺物出土状況（北西から）



完掘全景（南から）



遺物出土状況（南から）



遺物出土状況（南から）



遺物出土状況（南から）



R A059 竪穴建物跡 完掘全景（南から）



R D038 土坑 完掘全景（南から）



R D039 土坑 完掘全景（南東から）



R G012 溝跡 完掘全景（南東から）



第5図版 RA 057 竪穴建物跡 出土遺物



第6図版 RA 057～059 竪穴建物跡 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にしかどいせき							
書名	西鹿渡遺跡							
副書名	第36次調査 宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書							
編集者名	菊地 幸裕・佐々木 あゆみ							
編集機関	盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13-1 電話 019-635-6600							
発行機関	盛岡市教育委員会・株式会社アーネストワン							
発行年月日	2020年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしかどいせき 西鹿渡遺跡 (第36次)	いわてけんもりおかしさんぼん 岩手県盛岡市三本 やなぎ ちわり 柳2地割 28-1	03201	LE27-1046	39° 39' 52"	141° 09' 47"	20190417 ～ 0711	4,552	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西鹿渡遺跡 (第36次)	集落跡	奈良時代	竪穴建物跡 3棟, 土坑 2基, 溝跡 1条		土師器・須恵器 コンテナ 4箱			
要約	本遺跡は、これまでの調査で、奈良・平安時代の竪穴建物跡が40棟以上確認されている集落遺跡である。本調査においても奈良時代の竪穴建物跡が3棟検出されたほか、土坑及び溝跡が確認された。調査地点は、遺跡北部に位置し、当地域における該期の様相を解明する資料の一つとなった。							

西鹿渡遺跡

－ 第 36 次調査 宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書－

令和 2 年 7 月 31 日 発行

編集 盛岡市遺跡の学び館
〒 020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13-1
電話 019-635-6600 FAX 019-635-6605
e-mail iseki@city.morioka.iwate.jp
URL [http://www.city.morioka.iwate.jp/shisei/
moriokagaido/rekishi/1009437/1009438.html](http://www.city.morioka.iwate.jp/shisei/moriokagaido/rekishi/1009437/1009438.html)

発行 盛岡市教育委員会・株式会社 アーネストワン

印刷 株式会社 阿部印刷
〒 020-0873 岩手県盛岡市松尾町 2-2
電話 019-624-2242 FAX 019-624-0177
